明治中期における京都旅行
―与謝野晶子の記録から―

河　角　直　美

1. はじめに

近代の歌人である与謝野晶子は、17歳の時に母や妹と共に京都を旅行し、その際に見たもの、感じたことを「娘の頃の京都見物」として、1918（大正7）年4月の「中外」に書き残している[1)]。本稿は、この与謝野晶子の短い旅の記述を可能な限り地図化することで、明治中期における京都旅行の一例を提示したい。

明治維新以降も、京都では案内記類や地誌が数多く刊行された[2)]。それらには近世以来の名所の他、近代化により新たに創出された場所なども記載され、名所に対する認識の変化が指摘された[3)]。近世以来のそのような案内記類の記載内容に関する議論や、鉄道の開通に伴う観光案内書の変化も着目される一方[4)]、近代の京都旅行における観光行動の実態を述べた研究は必ずしも多くはない[5)]。また近世以来、様々な制約があったことから、女性の旅については不明な点も多いとされる[6)]。そのような動向に対し、本稿は与謝野晶子の京都見物の記録から、明治中期における女性の京都旅行の一例を提示したい。

また、京都旅行における観光行動の実態を理解するうえで、本稿は与謝野晶子の記した道中での感想にも注目する。「年弱の十七歳であった私の幼稚な頭に写った京都の春を其時の感じの儘に書いてみようと思ふ」という文句で始まるこの旅の記述は、単に訪問先が羅列されたものではない。そこでは、与謝野晶子が京都の各所を巡るなかで見たものに対する率直な感想も記述されている。本来ならば、歌人である与謝野晶子の記したものとして、文章の表現方法などが吟味される必要があると考えるものの、本稿は地理学の立場から、景観に関する記述、特定の場所に対する意見や感想に着目する。

そもそも人はなぜ旅をするのか。この疑問に対して篠原は、「人類の七不思議のひとつ」としつつ、旅先であるいは移動中で目にする見知らぬ世界への探求や好奇心によると指摘したうえで、旅では自分が育った場所との相違点に気付くことが重要であると加えている[7)]。

与謝野晶子は17歳の時の京都旅行にて何に好奇心を抱いたのであろうか。本稿は、特に感想を述べている場所、すなわち17歳の京都旅行で興味を持ち記憶に残った場所に着目し、それを地図化することで、旅という日常の世界を離れた状況において与謝野晶子が相違点を見出した場所を検討してみたい。

与謝野晶子（旧姓鳳）は、1878（明治11）年、現在の大阪府堺市堺区甲斐町にあった老舗の菓子商駿河屋の三女として生まれ、本名は「志よう」であった[8)]。小学校、高等小学校、さらに堺女学校（現在の大阪府立泉陽高等学校）に通いつつ、漢学塾に通塾したり、父の蔵書の古典・史書に親しんだりしたようである[9)]。そうしたなかで晶子は歌人を志した。歌集『みだれ髪』が刊行されたのは1891（明治34）年であり、同じ年に晶子は与謝野鉄幹と結婚した[10)]。なお、本稿で紹介する旅のほか、与

謝野晶子は度々京都を訪れている。

本稿は、まず景観に関する記述を踏まえつつ、与謝野晶子の訪問先と経路を可能な限り地図化し、明治中期の京都旅行における観光行動の一例を復原する。次に、晶子が具体的な意見や感想を述べている場所についても地図上に示し、与謝野晶子の目から見た京都を検討する。その際、比喩的な表現は避け、「～と思う」「～と感じた」など、直接的に感想と読み取れる表現のみを取りあげた。なお、本文中で記述を取り上げる際には、参照した文献に記載された文言のまま引用した。

2. 晶子の旅

(1) 1日目：旅のはじまり

記述の冒頭に「年弱の十七歳であった」とあり、また文中の「明治廿七年の」という記述から、この旅は晶子が数え年17歳（満16歳）の時、1894（明治27）年の春の旅であったことがわかる。「四月十四日の夜が明けると外は糠雨が降って」とあり、雨のなかでの旅立ちであった。なお、1894年4月14日の大阪の最低気温は11.1℃、最高気温は21.7℃であった[11)]。

この旅は、晶子と晶子の母、6歳下の妹、そして女中代わりに桐箱屋のおつやという老婆を伴ったものであった。世話を頼む者を同行させることができた点から、晶子の家に金銭的な余裕があったと考えられる。

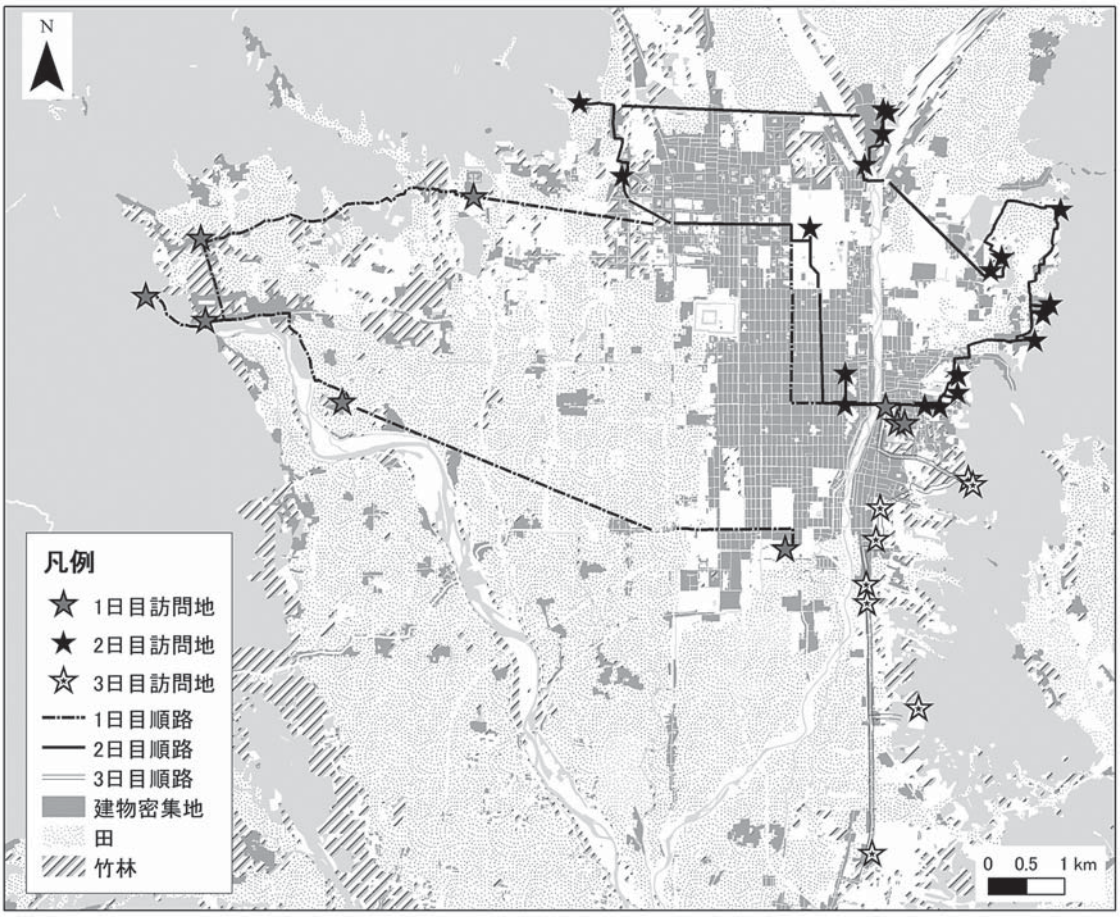
雨の降る肌寒い中、晶子たちは阪堺鉄道堺駅（現在の南海電鉄南海線堺駅）に向かった。「汽車が堺駅を出る頃には紡績所の赤煉瓦にやや強い自分等の我儘泣きの涙のような雨が傳っていた」とある。阪堺鉄道の大阪難波駅～堺駅間は、1888（明治21）年に全通していた[12)]。なお、1884（明治17）年測量1887（明治20）年製版の仮製図によれば、堺駅の東北部に「工場」が、1909（明治42）年測図1912（大正元）年発行の地形図には同じ場所に紡績工場が確認される。堺駅で汽車に乗った後、次の記述は「京の七條停車場へ着いたのは九時頃であった」となる。堺駅から京都駅間の記述はないが、阪堺鉄道で難波駅へ出た後に大阪駅に移動し、東海道線に乗車したと考えられる[13)]。なお、1894（明治27）年3月刊行の『近畿名所独案内』に付された汽車時間表によれば、午前8時50分に京都着の汽車がある[14)]。もし、その日の運行に遅れがなかったとすれば、晶子はこの汽車に乗車した可能性がある[15)]。

さて、「空はまた糠雨に返つて居た」なか、午前9時頃に七條停車場に着いた晶子一行は、嵐山へ向かう。晶子も記述しているように、山陰線の開通はこの旅行の後の1897（明治30）年であった。それに対し、「人が教えて呉れたように停車場で私の母は二臺の相乗車を終日雇い切りの約束をし」て晶子たちは京都を廻る。晶子の母は、知人から旅のアドバイスを受けていたようである。「價は一臺七十五銭であった」ことから2台で150銭であった。晶子たちは同じ人力車を3日間利用した。

京都駅到着以降の経路について、記述をもとに地図化したのが**第1図**である。ただし、訪問地間の経路がわかる場合と不明な場合があるため、記述に基づく経路と単純に訪問先間を直線的に記した経路が混在する。

(2) 1日目（4月14日）、京都駅から宿泊先まで

京都駅を出発した晶子たち一行は、「本願寺の横を西へ走って」とあることから、**第1図**のように



第１図　1894（明治 27）年４月における与謝野晶子の旅の経路
（与謝野晶子「娘の頃の京都見物」、明治 22 年測量同 25 年発行仮製図の GIS データ（立命館大学地理学教室作成）より）

七条通を西に向かったと理解された。なお、「十歳の秋に父が伴れて詣つてくれた」と記されており、晶子は７年前に父と京都を訪れ、その際には本願寺に立ち寄ったようである[16]。

堀川を渡って間もなく、一行は「霞んだ野へ出」る。雨の降る様子が記されており、京都駅出発後もしばらく雨の降るなか、晶子たちは田畑の広がる地域に出た。仮製図（明治 25 年測量）によれば、大宮通付近以西には田畑が広がっている（**第１図**）。嵐山へ向けて移動する途中には、「道端に澤山ある竹藪」の中に「紅椿が咲いて…其處にはまた必ず鶯が啼いて」いたと晶子は記している。仮製図から御土居の竹林も含め、竹林の分布を読み取ることができる。ただし、周囲に竹林の広がるような道は確認されず、移動経路の詳細はわからない。

晶子たちは途中、梅の宮神社（梅宮大社）を参詣し、池の菖蒲、緋桃の花を見物した。続いて、一行は桂川北岸の堤まで出てから嵐山へ向かう。晶子は桂川北岸の堤から嵐山の方向を見た際に「水を埋めた筏と所々に見える川の石原」と記しており、桂川に木材の浮かぶ様子が想像される。嵐山に到着した一行は「三軒家の某亭」で食事をした。この時には雨が止んでいたようである。嵐山の「三軒家」という料亭は、当時、著名な観光施設であった[17]。

昼食後、その料亭の女中に勧められ、晶子の母が船を雇って川を遡った。「僅かに十町餘り」で、「其頃はまだ暇家のような温泉場」だった地点に船が着けられた。この温泉場は角倉了以が保津川開鑿工事の犠牲者を弔うために創建した大悲閣の直下の敷地で、嵐山温泉が 1897（明治 30）年頃に開業している[18]（現在も名称は異なるが旅館が存在する）。晶子は、この旅の後にできる嵐山温泉も認知し

ていたようである。

下船後、一行は車で清涼寺の釈迦堂に行き、「壬生狂言らしきもの」を見物した。続いて、廣澤池の汀を通り「音頭山（音戸山）」を越えて、紅い門の構える仁和寺を訪れた。一行が訪れた際、仁和寺では御室桜が見頃であったようで、酒宴を催す人々がいたと記されている。

仁和寺を出た後、「花園村から入つた京の街の長い一筋の通りは中立賣だと車夫が教えてくれた」と記述される通を経て、「四條大橋を南へ入った縄手（大和大路）の六花園と云う」宿に着く。ところで、東西の通である中立売通は、仮製図では千本通より西にある花園村まで直通していない。一条通と接続することで花園村まで直通するのは、中立売通に市電が開通した1900（明治33）年頃と推定される[19]。よって、晶子たちは中立売通ではなく一条通を利用した可能性があるものの、晶子の記憶の間違いか、車夫の間違いかをここでは判断できない。また、中立売通からどの通を経て四条通大和大路南の宿まで至ったのかも記載されていない。

さて、夕方に宿についた後、晶子たちは昼間とは別の車を雇い、花見小路から歌舞練場へ向かう。記述から同じ宿に中国人が宿泊し、また、歌舞練場の周囲には多くの人がいたようで、晶子は「雲のやうな人衆（ひとごみ）」と記している。都踊については、最初の場面の記述はあるが「四場五場はもう覚えていない」としている。

旅の初日、早朝から汽車で移動しているにもかかわらず、晶子たち一行は梅の宮大社、嵐山、清涼寺、御室など京都の西側における主要な名所を巡った。そして、夜には都踊の見物するなど、晶子は京都での観光を終日楽しんだ。

(3) 2日目（4月15日）と3日目（4月16日）

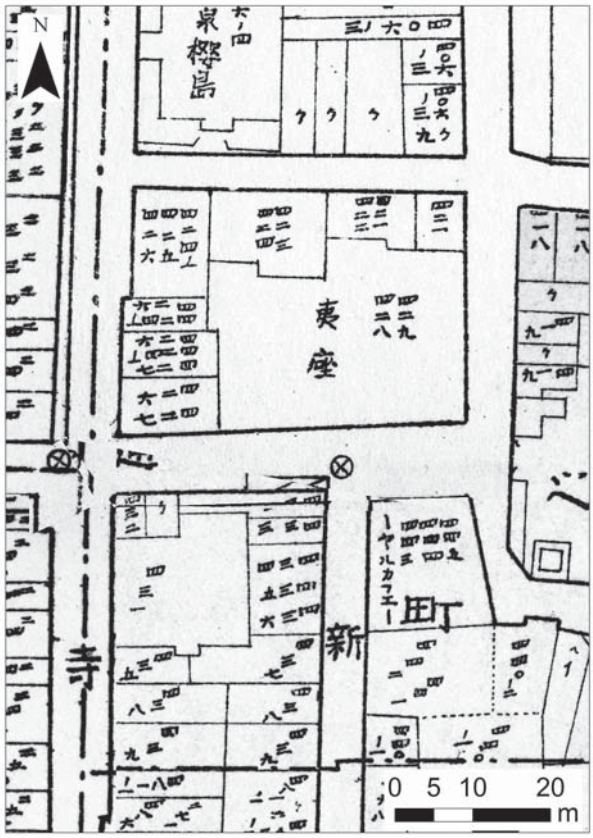
二日目、晶子たちは一日目と同じ車で旅を続けた。**第1図**のように祇園社へ詣でたのち、「もう葉になつた枝垂柳の横から圓山へ上り」、知恩院を「型の通り」見物してから青蓮院に寄り、そして南禅寺に向かった。円山公園の詳細な記述はないが、現在の円山公園は1907（明治40）年以降に整備されたものであり[20]、晶子が見たのは、山手に世阿弥ホテルを望みつつも整備前の円山であったと推察される。

南禅寺の後、場所は特定できないが「相模屋」で晶子たちは昼食をとった。次に、鹿ケ谷から、「永観堂と若王子神社と銀閣寺は何れが先で何處が後に見たかよく解らない」が参詣し、「黒谷と真如堂を続いて見」たようである。銀閣寺や黒谷など、いわゆる名所に立ち寄ったものの詳細な記述はなく、図に示した順序は推測である。真如堂の後、「加茂川を一旦西に渡って、更に葵橋を通って」から、晶子たちは下鴨神社に詣でた。昨日の雨の影響で御手洗川の水量が増していたため、「岸の根笹や草の葉をひたひたと濡らしていた」と表現されている。糺の森では「山櫻に混じつて紅梅がまだ咲いて居た」ようである。明治中期における糺の森の植生について、仮製図から一部に雑樹林を読み取ることは可能であるが、管見の限り詳細を確認することはできなかった。

続いて一行が向かったのは金閣寺であった。途中「東の大文字山は靄に隠れ居てた」ようで、この日も好天ではなかったと推察される。下鴨神社から金閣寺へ向かった際の経路は記述されておらず、一行は「西の大文字山の眞下を通っ」ていることのみ理解された。金閣寺は「幼くて父に伴はれて行つた時は…＜中略＞…庭だけ見物した」が、「この日は座敷へ上つて實物を見」たのち、茶を飲んだとある。晶子は10歳の時に父と京都に来た際にも金閣寺を訪れていた。その後、北野神社の梅林を見て、1日目と同じ道とされる中立売通から一行は市街地へ入った。宿に行く前に、晶子たち

は「御苑内の展覧會」を見学し、晶子は上村松園[21]の絵に心惹かれたようで、絵を見た際の感想を記述している。

2日目の夜も晶子たちは外出し、この日は四条通から京極方面を見物した。晶子は、京極通の突き当りにあった戎座で演劇を見ようと中に入ったものの（**第2図**）、役者の印象が悪くすぐに出たようである。2日目の出発時間は記述されていないものの、祇園社から南禅寺、銀閣寺、黒谷、下賀茂から金閣寺、京都御苑といった、京都市東部から京都市北部の名所を晶子たちは終日かけて巡った。



第2図　昭和初期頃の夷座
（長谷川家所蔵『京都市明細図』（大正末期～昭和初期）より）

3日目、晶子たちは「朝のうちに清水」へ車で行き、途中で焼物店が並ぶ様子を「海の渚の砂原を思はせ、美しい女の素肌を思はせる焼物店に並んだ街は、山の間から見える青い空と極めて映りの好いものだ」と記述している（**第1表、12番**）。3日目は好天に恵まれたことが伺える。音羽の滝を見た後、舞台で餅を食しつつ見えた東西本願寺の感想を晶子は記述している（**第1表、13番**参照）。清水から鳥邊野経由で大谷へ向かい、大佛、三十三間堂も晶子たちは見学した。その後、一の橋、二の橋を渡り伏見街道を南下し、藤の森（神社であろうか）へ向かった後、今度は伏見街道を北上したものとみられ、「稲荷山を廻り、午後に堺へ帰った」とある。稲荷山とあるが、伏見稲荷神社を詣でたとは書かれていない。また、帰路も汽車であったと想定されるものの、七條停車場からなのか、当時すでに開通していた伏見線伏見駅から乗車したのかは判然としない。

以上、明治中期の与謝野晶子の京都旅行の行程を記した。**第1図**のように、判然としない経路は直線で結んでいることからあくまで推定となるが、人力車を使った3日間の総移動距離（京都駅以降伏見駅として）は約56km、1日目の移動距離は約23km（京都駅以降、船上含む）、2日目約23km、3日目約10km（稲荷山まで）であった。また、この旅行の経路をみると、晶子たちは山地と平野の境界付近を移動していることが理解される。山裾の寺社への観光が中心の旅であり、市街地で訪れたのは歌舞練場、京都御苑、京極のみであった。

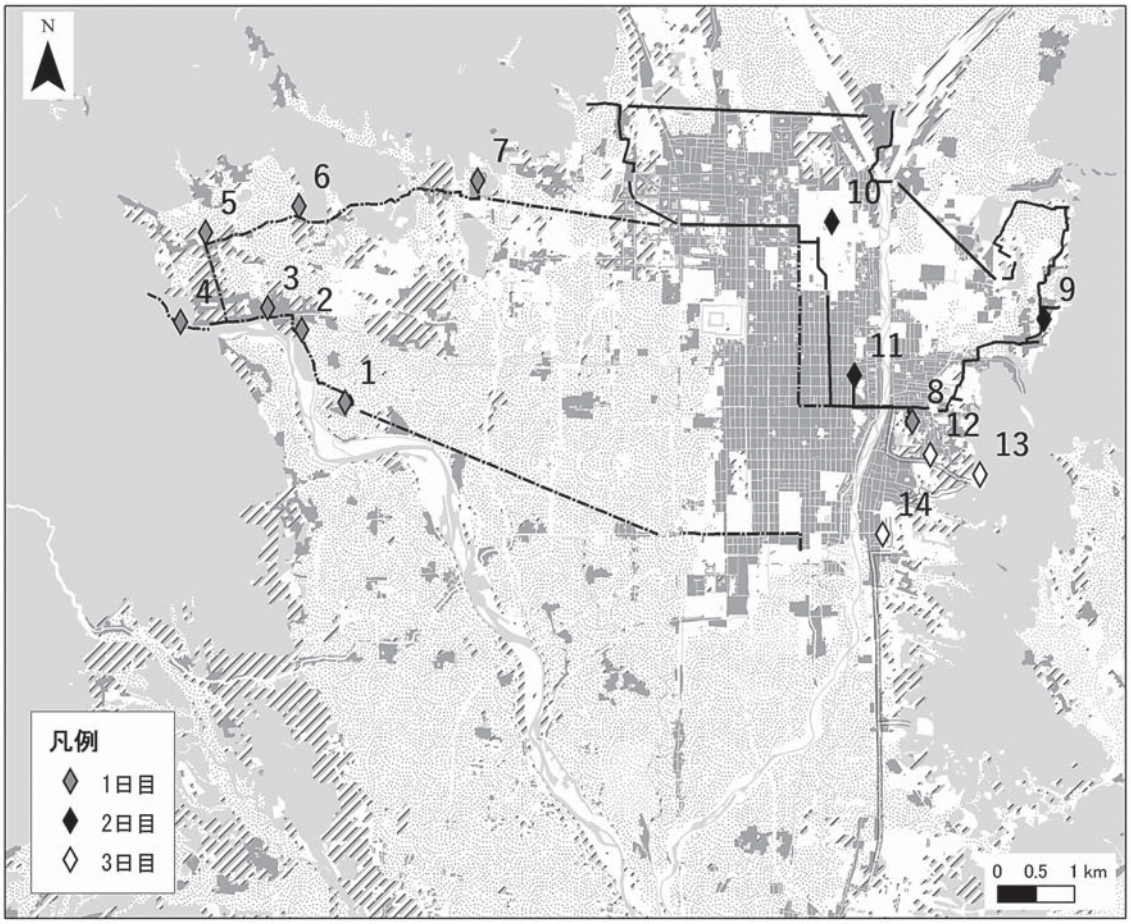
訪れた寺社の数は、1日目3か所、2日目12か所、3日目4か所（伏見稲荷大社は判然としないため含んでいない）であった。2日目の訪問地はほとんど寺社であり、訪問地が東山周辺に集中している点は近世の例と類似している[22]。記録には晶子たちのこの旅の目的が記述されていないものの、寺社参詣を目的とする旅であったならば、2日目が重要な日程であったと考えられる。

3. 晶子の目から見た京都の景観

次に、晶子が意見や感想を記した場所について検討する。先に述べたように、記述には比喩的表現もみられ、それぞれ適切な解釈が必要であると考えるものの、筆者には専門的な解釈が難しい。そこで、本稿は晶子が「～と思う」などの文末で、素直に意見や感想を表現している部分にのみ着目した。

文中で感想が述べられている場所を地図上に示したのが**第３図**であり、個々の感想を記したのが**第１表**である。**第１図**から、堺駅を出発し嵐山や仁和寺を巡り、夜には都踊も見物した１日目の感想が最も多かったことがわかる。参詣した寺社の数は２日目に多かったものの、各所での直接的な感想の記述は２日目、３日目と日が経つほど減少している。そのなかで、最も詳細な感想が述べられていたのは嵐山であった。そこで、嵐山に対する晶子の表現をいくつか検討したい（**第１表、２番～４番**）。

先述したように桂川北岸の堤で「水を埋めた筏と所々に見える川の石原」を見た晶子は、その上流の嵐山を「奥行のない侮らはしい物」と想像した。それは「餘りにこの變化のない道が長いから」と自身で解釈している。しばらく続いた田園風景に飽きてしまっていたのか、嵐山に対する晶子の第一印象はよいものとはいえなかった。ところが、渡月橋が見え始め、「深い青に浅い緑の隅を入れ



第３図　与謝野晶子が直接的な感想を記した場所
（与謝野晶子「娘の頃の京都見物」、明治 22 年測量同 25 年発行仮製図の GIS データ（立命館大学地理学教室作成）より作成）

た嵐山」に晶子は驚喜した。「濃いいのは山の松と杉で、薄いのは雑木と若芽の楓である」と記し、そのなかで「六七分も散つた」山桜に晶子は気付いた。仮製図によれば、嵐山の植生としてマツ林が、桂川の河川沿には広葉樹が読み取れる。晶子はこの嵐山を「やや氣の重さうな美しい人に似た山」とも表現した。そして、短い距離ではあったものの、「落花を瀬に覗き、渓間の瀧を仰いで、さらに紅紫色の幹をした両岸の雌松山を巡って静かに綱で引かれながら船の上つて行く」のを、晶子は「空の日の歩みもこの如く静かな別乾坤の中に自分を置いて居る時かと私は疑った」と記している。「渓間の瀧」は、嵐山から大堰川に流入しているいくつかの急流の小河川と推察される。また、当初は松とだけ記した木々も「雌松山」（アカマツ）とより具体的な樹種を改めて記し、さらにその景観を「別乾坤」、すなわち別世界にいるようだと述べた。

第１表　与謝野晶子の感想の内容

（与謝野晶子「娘の頃の京都見物」より）

番号	日程	与謝野晶子の直接的な感想を含む記述
1	１日目	梅の宮神社には社殿に書かれた三十六歌仙の古い繪にふさわしいやうな櫻は一本も無かった。若木の八重櫻はその菖蒲にも山吹にも大木の柳にも品位の劣つた物のやうに見えた。黒い程の緋桃の花は木草び世界にもかうして通って居る生物の血があると繁みの中で言って居るやうに見えた。
2	１日目	水を埋めた筏と所々に見える川の石原は私をして、この流れの上にある嵐山を奥行のない侮らはしい物に想像させ出した。
3	１日目	深い青に浅い緑の隅を入れた嵐山は私を驚喜させた。濃いいの山の松と杉で、薄いのは雑木と若芽の楓である。其等ははつきりと目に映つた後までまだ渓々の山櫻に氣が附かなかつた。もう六七分も散つた後であつた。
4	１日目	岩々に眞白く散る波を眺め、落花を瀬に覗き、渓間の瀧を仰いで、さらに紅紫の幹をした両岸の雌松山を巡って静かに綱で引かれながら船の上つて行くのを、空の日の歩みもこの如く静かな別乾坤の中に自分を置いて居る時かと私は疑った。
5	１日目	壬生狂言めいたのがが催されていた。三人の役者の中に老爺に扮したの被いて居た黄色の大頭巾は總ての白けて見える中に光つて居た。
6	１日目	廣澤の池の汀を通つて葦の葉に花の散りかかつた趣を私は喜んだ。
7	１日目	土を一尺も離れた所にはもう花傘のやうなたわたわな花を附けたその木の間を、毛氈を敷いた床几とすれすれに歩いて、この寺の櫻は私たちのやうな町娘の友達であると云ふやうなことを思つた。塔に近い所に紫の躑躅が十本あまり高く咲いたのを艶に思つた。
8	１日目	櫻に染めた水色の舞姫達の振袖を私は今日まで何も紛れず忘れずに美しいものと思つて居る。
9	２日目	鹿が谷の竹林の鶯と椿を昨日も聞いたり見たりしたものでありながら、此處のは繪巻の上に置く價のあるもののやうに思はれた。
10	２日目	御簾の掛け渡されたやや古い御殿作りの會場は階段を上り下り、内橋渡殿の通路も若い娘心を樂しませた。
11	２日目	黒田騒動を演じて居たが、座頭の小陣と云うふ役者の奥方になつて居る顔が餘りに悪いので、厭になつて…
12	３日目	海の渚の砂原を思はせ、美しい女の素肌を思はせる焼物店に並んだ街は、山の間から見える青い空と極めて映りの好いものだと私は思つた。
13	３日目	何とか餅と云ふものを食べながら、東西本願寺の御堂の大きい屋根を見て、これは煙つた雨の中で見るべきものだなと私は思つた。
14	３日目	三十三間堂は、踏むに塵の立つ廊下の長さが苦しかつた。ころころと幾つも横にされた千手観音の像は金で塗られてある爲に淋しくも悲しくも思はれた。

初めは軽蔑していた嵐山の景観を、間近に見て以降、全体から個別の木々や花々についてまで、晶子は様々な表現で称賛している。

一方、いくつも参詣した寺社では、境内で見た花、見物した狂言、舞台からの景観などに関する感想があった。ただし、仏像や伽藍に関する感想はほとんどなく、3日目に訪れた三十三間堂での「ころころと幾つも横にされた千手観音の像は金で塗られてある爲に淋しくも悲しくも思はれた」という記述があるのみである（**第1表、14番**）。それも観音像を称するような内容ではない。そして、銀閣寺、永観堂に関しては、訪れた順番さえ記憶していない。17歳の晶子にとって寺社への参詣はあまり印象的ではなかったのであろうか。

さらに、晶子の感想として興味深い記述がいくつかある。1日目、京都駅からの移動中、晶子は「街を行く間、私は一所に乗つたおつや（お供の女性）の黒い襟の襟裏の紫が田舎者らしく見えるのを氣にして、手を伸ばして折り込んで遣つた」と記述している。京都の市街地で同行者が田舎者に見られることを晶子は気にしていた。しかし、堀川以西まで来たときに「そんな面倒も無くなった」と記している。**第1、3図**から確認できるように、明治中期の堀川以西は田畑が広がる農村であったため、人目を気にする必要がなくなったのであろう。また、御室桜を見た際には、「花傘のやうなたわたわな花」と記し、「この寺の櫻は私達のやうな町娘と友達であると云ふやうなことを思った」と記述している（**第1表、7番**）。咲きほこれる御室桜は、農村にあっても町から来た自分たちと友達であるということであろうか。2日目には、鹿ケ谷の道を行きながら見聞きした椿と鶯について、初日に嵐山へ行く途中で見聞きしたそれと比較して「此處のは繪巻の上に置く價のあるもののやうに思はれた」という（**第1表、9番**）。同じ椿と鶯でも、市街地に近い場合と農村で見聞きした場合とを比較し、市街地に近い方を評価している。正確な解釈はできないが、このような町から来た自分たちと田畑広がる地域、すなわち都市と農村を意識する、あるいは比べるような記述が見受けられた。

本稿で取り上げた記録は、晶子が41歳の時、17歳の時のことを思い出して記し発表したものである。よって、旅行直後にはおそらく他に印象深い場所もあった可能性がある。とはいえ、20年を経てもなお晶子にとって記憶に残っていたのは嵐山であったといえるだろう。したがって、2日目以降の感想、記憶は乏しいものとなったと推察される。

さらに、17歳の晶子は、自身が都市から来た者であることを意識している様子が垣間見られた。堺の市街地で育った晶子には、当時、京都市街地周辺に広がっていた農村景観は、日常と違う世界として意識されたのであろう。そして、晶子のそのような記述から、嵐山周辺と嵐山までの道のりに広がる市街地化される前の農村景観がより理解される。

なお、1日目の夜に歌舞練場で見た都踊に対して、踊りそのものではなく、「櫻を染めた水色の舞姫達の振袖」を「私は今日まで何にも紛れず忘れずに美しいものと思って居る」と晶子は記している。

4. おわりに

本稿は、与謝野晶子が記した旅の記録から、明治中期における女性の京都旅行の一例を提示した。晶子たち一行は人力車を使用して推定で1日20km前後移動し、経路から京都の著名な寺社・名所を巡った様子が明らかになった。それは、近世期の訪問先とも類似していた。

この旅の内容はあくまで一例であって、一般的な経路であったか否かを指摘することは難しい。ただし、大阪南部の堺からでも、早朝の汽車に乗れば午前中に京都駅（七條停車場）に到着し、初日から旅を楽しむことが可能であったことが理解された。さらに、夕方以後も街中を散策するなど終日旅を楽しむ様子がうかがわれた。

一方、感想の記述から、17 歳の与謝野晶子にとって、この旅で最も好奇心を抱いたのは嵐山であったことが推察された。東山周辺を中心に巡った寺社での感想はほとんどなく、関心を持った対象に違いがみられた。さらに、都市と農村を意識するような記述がみられた。それは、嵐山周辺を含む京都市の西側が市街地化される前の景観に対する、町から来た晶子の印象として興味深い。また、人目を気にするような素振りは、「年弱の十七歳であった」と晶子自身が記すように、複雑な年頃のものともいえるだろう。

ところで、与謝野晶子は 1901（明治 34）年に堺の家を出て上京し与謝野鉄幹と結婚後、40 年間で約 170 回の旅をしている[23]。ただし、それは決して日常からの逃避や楽しみを目的とする観光ではなく、困窮していた生活を維持するためであったという[24]。地方の役人が、与謝野鉄幹と晶子を招待し、その土地の名所等を案内しつつ歌に詠んでもらうことで、町や村が紹介されることを期待したのである[25]。鉄幹と晶子の詠む歌が観光による地域の活性化に駆り出され、歌を詠んだ 2 人はそれにより生活を維持していくようになる。すなわち、本稿で取り上げたような晶子の記述や感想が、本人の意図はともかく、人々の旅への好奇心や探求心を掻き立てていくことになる。

先述したように、17 歳の京都旅行の記録は 1918（大正 7）年 4 月に発表されたものである。記述のすべてが 17 歳の頃の気持ちのままであったのか否かは判断できない。ただし、晶子の旅の回数はこの記述以降に増加することから[26]、生活のためとして旅を憂鬱に感じる前の、17 歳の旅の記憶を純粋に記したものであると考えたい。

最後に、本稿は理解しやすい表現の記述のみ着目したが、本来ならばその他の様々な表現について、やはり日本文学等の専門的な解釈を踏まえた議論が必要であると考える。今後の課題としたい。

（付記）

本稿の執筆にあたり、立命館大学文学部田口道昭教授には与謝野晶子の「娘の頃の京都見物」に関する記述の所在、関連書籍などについてご教示いただきました。記して感謝申し上げます。

注

1）与謝野晶子の旅の記録は、2016 年 7 月 1 日に立命館大学にて行われた「京都学研究会」において、文学部田口道昭教授がご講演された内容である。本稿は、田口先生に改めて記述についてご紹介いただき、ご了解を得て取り上げた。また、本稿の引用は、与謝野晶子著 / 内山秀夫・香内信子編集・解題『与謝野晶子評論著作集 18 巻』、龍渓書店、2002 に掲載されたものを参照した。

2）長谷川奨悟「明治前期の名所案内記にみる京名所についての考察」、歴史地理学 54-4、2012、pp.24-45。

3）前掲 2）

4）前掲 2）、また、山本光正「旅行案内書の成立と展開」、国立歴史民俗博物館研究報告 155、2010、pp.109-135、など。

5）近世における名所案内の記載内容と実際の観光行動を指摘した研究としては次のものが挙げられる。谷崎友紀「近世京都における旅人の観光行動―旅日記と小型案内記との比較をとおして―」、立命館地理学 26、2014、pp.47-58。

6）山本光正「近世・近代の女性の旅について―納経帳と絵馬を中心に―」、国立歴史民俗博物館研究報告

108、2003、pp.165-181。女性の旅に関する先行研究は少ないなか、山本志乃「旅日記に見る近世末期の女性の旅―「旅の大衆化」への位置づけをめぐる一考察」、国立歴史民俗博物館研究報告 155、2010、pp.1-19 がある。

7）篠原　徹『フィールドワークの絶望と愉悦―山野や野を歩く―』、歴史民俗博物館振興会、2015。

8）土田　博・富村俊造編『与謝野晶子を学ぶ人のために』、世界思想社、1995 に添付された年表より。

9）前掲 8）

10）前掲 8）

11）気象庁が公開している「過去の気象データ検索」における、1894 年 4 月 14 日の大阪の最高気温、最低気温データに基づく。http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/（閲覧日 2016 年 11 月 24 日）

12）日本貨物鉄道株式会社貨物鉄道百三十年史編纂委員会編『貨物鉄道百三十年史（上巻）』付図より。

13）阪堺鉄道難波駅から東海道線大阪駅へ向かった際の移動手段は記述されていないものの、三木によれば、明治期の大阪では人力車が移動手段として利用されたとある。三木理史『都市交通の成立』、日本経済評論社、2010、pp.247-261。

14）今井七太郎『近畿名所独案内』、今井七太郎出版、1894、（国立国会図書館近代デジタルライブラリーにて閲覧）による。

15）なお、京都駅に午前 8 時 50 分に到着する汽車は大阪駅を午前 7 時 26 分に発車する。すなわち、それまでに大阪駅に到着している必要がある。島本篤平（澪標航夫）『大阪繁盛記』、出版島本篤平、1894、（国立国会図書館近代デジタルライブラリーにて閲覧）から堺駅発の汽車の時間をみると、堺駅午前 5 時 40 分の始発が難波駅午前 6 時 10 分着とある。堺と難波の間は 30 分ほどかかり、また同資料には始発以降「四十分毎に二十六回発着ス」とあることから、次の汽車は午前 6 時 20 分で難波駅に午前 6 時 50 分着と考えられる。難波～大阪間を人力車で移動したとすれば、30 分で乗り換え、移動は難しいと思われることから、晶子たちは堺駅で始発の汽車に乗車したと推察される。

16）京都大阪間の鉄道は明治 10 年に開通しているものの、その時に汽車を使ったか否かは不明である。

17）小川功「企業勃興期における京都観光資本家の目論見と違算―料亭・嵐山三軒家株式会社の発起を中心に―」、跡見学園女子大学マネジメント学部紀要 11、2011、pp.1-17。小川によると、正岡子規も 1892（明治 25）年に訪れており、谷崎潤一郎の小説『細雪』にも当該地が登場するとされる。

18）小川功「嵯峨・嵐山の刊行先駆者―風間八左衛門と小林吉明らによる嵐山温泉・嵯峨遊園両社を中心に―」、跡見学園女子大学マネジメント学部紀要 10、2010、pp.1-18、による。

19）京都市『京都の歴史 8』、学芸書林、1975、pp.460-461。

20）清水　弘「京都御苑と円山の公園化」植村善博・香川貴志編『京都地図絵巻』、古今書院、2007、pp.60-63。出村嘉史・川崎雅史・田中尚人「近代の京都円山公園における景観構成に関する研究」、2001、土木計画学研究・講演集 24-2、pp.789-792。なお、『京都の歴史』によれば、1886（明治 19）年から円山公園と称され、1889 年頃から公園としての整備が進められたとされる。（京都市『京都の歴史 8』、学芸書林、1975、pp.261-263。）

21）上村松園（1875（明治 8）年～ 1949（昭和 24）年）は京都に生まれ、官展などで京風俗や古典文学に想を得た作品を次々と発表し、画家として頭角を現す。昭和期には簡潔で美しい線、無駄の無い造形、明るくしかも抑えられた色彩などに特色を見せながら、内面的な深みを加え、高い気品を備えた女性像を確立させた。足立美術館ホームページより（https://www.adachi-museum.or.jp/archives/collection/uemura_shoen）閲覧日

22）前掲 5）

23）沖　良機「与謝野晶子と旅」（土田　博・富村俊造編『与謝野晶子を学ぶ人のために』世界思想社、1995、所収）、pp.317-337。

24）前掲 23）

25）前掲 23）

26）前掲 23）

（本学文学部准教授）

Traveling to Kyoto in the Mid-Meiji Era: From Yosano Akiko's Records

by
Naomi Kawasumi

This paper considers the situation of traveling to Kyoto in the mid-Meiji era by analyzing modern-age poet Yosano Akiko's brief account of her trip to Kyoto with her mother and sister in 1894（27th year of Meiji）.

More specifically, this paper uses Yosano's account to provide a map which indicates her three-day itinerary and the places about which she made detailed remarks. As a result, it is shown that Yosano and her companions hired a rickshaw（jinrikisha）for three days and mainly visited temples/shrines located at the foothills of mountains; in the central city area, they only visited Kabuki Renjyo, Kyoto Gyoen and Kyogoku Theater. The numbers of temples/shrines they visited were: three on the first day, twelve on the second day and four on the third day. The places they visited were concentrated around the Higashiyama area, which shows a similarity to trips to Kyoto in the early modern era. However, Yosano's trip to Kyoto considered in this paper is but a single example in the mid-Meiji era, and a further accumulation of examples is necessary.

The place which Yosano described in detail and which probably impressed her the most was Arashiyama. She made very few remarks on the numerous shrines/temples she visited. One also finds some descriptions that show an awareness of the difference between the city and countryside, and from these descriptions the village landscape of places west of Horikawa-dori, such as the Arashiyama area, before they were urbanized can be understood in detail. After marrying Tekkan, it is said that Yosano Akiko went on around 170 trips in order to make a living. Further consideration of Akiko's journeys from a literary perspective is required.